ワールドカップに関連して

2020年4月
石原勝巳氏の随筆を転記

日本代表チームがサッカーのワールドカップにおいて、おっさんパワーとやらで薄氷を踏みながらも予選リーグを乗り越えて突破した。その結果を受け、日本中ののぼせ者たちは深夜に喜びを爆発させている。

そんななかで、私の場合は、ふと4年前のブラジル大会のことを思い出していた。あのときは、確かバリの友人宅で深夜一緒に蚊音を聞きながらテレビ中継を観戦していた。ケイスケ・ホンダが鮮やかなゴールを決めたのを目撃した。一瞬勝つのではないかという錯覚に陥ったが、結果ゲームは惨敗してしまった。3人（私と友人とその息子アグス）と一緒に、ムナン（勝ち）・カラー（負け）などと言葉を交わしつつ評論しながら、ねむい目をこすりながら楽しくひとときを過ごした。その亡き友人はバリで最も古いつきあいの人であった。信頼できる人物だからこれまでつきあえてきたのだと思う。翌年再訪したときは、その友人は体調を崩し、一言もしゃべれず、自力で生活することすらできない寝たきりの状態になっていた。こんな友人の姿を見るとはまさか思わなかった。奥様が必死で看病介護をされていた。私はその手を握るぐらいしかできなかった。この人にこの疾（やまい）ありで、約1年の闘病後、天（ソルガ）に召された。

人生は出会いと別離（わかれ）の連続だとしみじみ感じたものだ。今となっては、もう故人に会うことは叶わないが、同人（どうじん）とのいろいろな思い出が脳裏に今もなお鮮烈に保存されているので、ときどき検索するようにしている。

（注）

この人にしてこの疾（やまい）あり： 孔子の論語「（天命とはなんと無情なることか！）

お前のような立派な人間がこのような病にかかるとは、かからねばならないとは！」

同人（どうじん）： 同じ志を持った者、同じ趣味を持った者のこと